

# 第22回 SIHH国際高級時計サロン

## A. LANGE & SÖHNE

A.ランゲ&ゾーネ

☎ A.ランゲ&ゾーネ ☎ 03-3288-6639

実用性重視の  
開発にみる  
ドイツ高級時計の  
堅実な発展

A.ランゲ&ゾーネの2012年は実用的な機能性に重点を置いた開発成果を発表する年となった。既存の「グランド・ランゲ1」「ダトグラフ」は新ムーブメントに変更され、その結果、前者では文字盤デザインがより見やすくなり、またケース厚が2・2ミリ薄くなり、後者ではパワーリザーブが延長された。そして今年の話題はランゲ1ファミリーに加わった永久カレンダー・モデルで、文字盤外周に月表示を置くことでランゲ1のレイアウトを崩さず、視認性にも優れる。新たに開発されたムーブメントはすべて自社製ヒゲゼンマイを装備する。



「ランゲ1・トゥールビヨン・パーペチュアルカレンダー PT」。ランゲ1のファミリーに初めて永久カレンダー・モデルが加わった。21Kゴールドのセンターローターを備え、624部品から成る新開発の自動巻き、L082.1（パワーリザーブ約50時間、毎時2万1600振動、68石）を搭載する。ランゲ1のレイアウトを生かすために、月表示リングを文字盤外周に置いている。このため一般的な永久カレンダーが用いている48歯の歯車による月表示とは異なる機構が開発され、そのメカニズムで特許を出願中だ。カレンダー表示と122年に1日の誤差のムーンフェイスは深夜0時にジャンプして瞬時に切り替わる。それぞれのカレンダー表示はプッシャーを使い、ケース側面から修正が可能だ。また裏蓋側6時位置には自社製ヒゲゼンマイを装備し、ストップセコンド機能搭載のトゥールビヨンを備える。裏蓋側にトゥールビヨンを置いた理由は文字盤の視認性を確保するためだという。ケース径41.9mm、厚さ12.2mm、プラチナ。予価2958万9000円。11月以降発売予定。



「ダトグラフUP/DOWN PT」。1999年に発表された同モデルもリニューアルされた。ケースは直径39mm、厚さ12.8mmから直径41.0mm、厚さ13mmに大型化された。コラムホイールを装備し、フライバック機能を備えるムーブメントは従来のL951.1から新開発の手巻きL951.6に変更され、パワーリザーブは約36時間から約60時間に延長され、また自社製ヒゲゼンマイを備える。文字盤上では大型日付表示は従来よりも40%大きく、6時位置にはパワーリザーブ表示が加えられ、またインデックスもローマ数字からバーインデックスとなった。PT。予価756万円。5月以降発売予定。

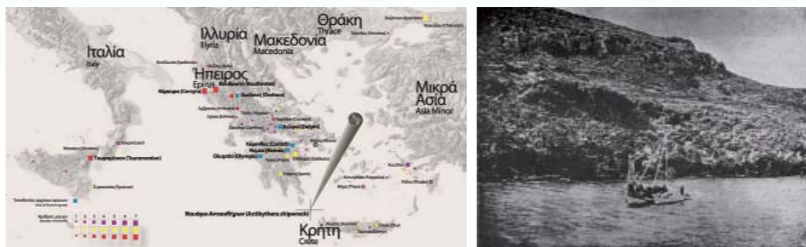
「グランド・ランゲ1 YG」。2003年に発表された同モデルもリニューアルし、ケースは直径41.9mm、厚さ11.0mmから直径40.9mm、厚さ8.8mmに変更された。また文字盤上ではサブダイヤルの重なりがなくなり、大型日付表示は10%拡大された。これは手巻きの新キヤリバー、L095.1によるもので、従来のL901.2と比べて径を30.6mmから34.1mmに大型化し、香箱をふたつからひとつにし、部品の重なりを平面に並べたことで厚さが5.9mmから4.7mmとなった。パワーリザーブ約72時間（従来と同じ）。自社製ヒゲゼンマイ。毎時2万1600振動。18KYG。予価323万4000円。6月以降発売予定。

## ウブロ2012新作「アンティキティラ」

# 古代の科学者に寄せる畏敬の念が生んだ天文時計

2010年夏にウブロを取材した際、マティアス・ビュッテ氏は「現在、アンティキティラの機械を復元した時計を開発中です」と目を輝かせながら語った。その時計が遂に完成し、3月8日開幕のバーゼルワールド2012で発表される。それに先駆けビュッテ氏に開発経緯を取材した。

取材文／北郷 建一 写真提供／ウブロ



1901年にアンティキティラ島で発見された天体の動きを示す「アンティキティラ島の機械」。2005年にX線による断層写真で中味が解明され、木箱のなかには30以上のブロンズ製歯車による輪列も含まれた。

2011年10月、ウブロはパリの工芸博物館でまったく新しいアプローチによるムーブメント、「Antikythera（アンティキティラ）」を発表した。正確に言うところ、古代ギリシア紀元前1世紀から2世紀のものと思われる、アンティキティラという「古代機械」への敬意を込めたムーブメント、である。アンティキティラとは、クレタ島の北西にある小さな島の名前であり、その島の近海で海綿動物漁をしていたダイバーにより1900年頃に海底の沈没船から発見されたことから名づけられた。正式には「アンティキティラ・メカニズム」と呼ばれるこの「機械」自体、まだ謎が多い古代遺物であるが、ウブロが発表したムーブメントも3月8日に開幕するバーゼルワールド2012で正式にお披露目ということで、いまだに全容が明らかにされたわけではない。

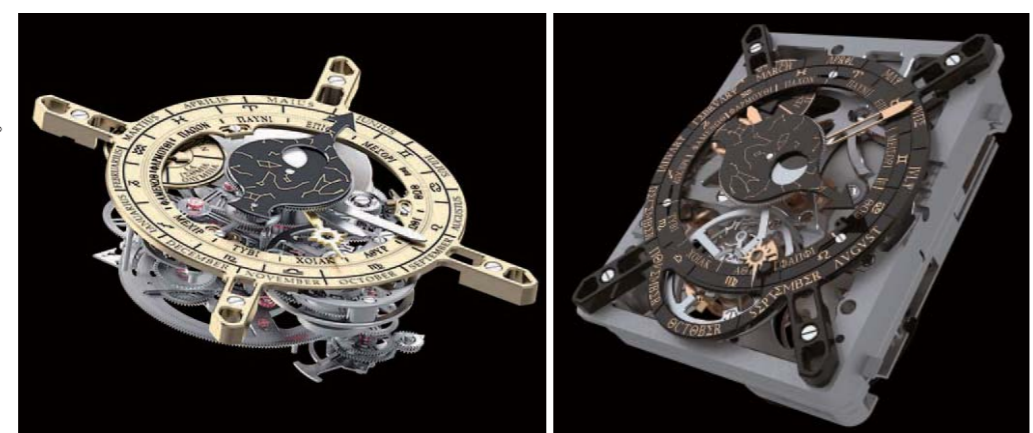
従来は「フュージョン」というコンセプトのもと、主にケース素材で常に市場をリードしてきたウブロであるが、20

10年旧BNBコンセプトのマティアス・ビュッテ氏をはじめとする人材・資材を手に入れ、外だけではなく中身（ムーブメント）についても革新的な作品を発表し始めたところである。昨年は、MP1、MP2という意欲的なモデルを発表し、その方向性をしっかりとマーケットに印象付けたウブロであるが、このアンティキティラにおいても同じビュッテ氏のチームが開発にあたっており、今年のバーゼルの目玉のひとつになると思われる。アンティキティラ・メカニズムという古代遺物の研究と、それをベースにした腕時計のムーブメントとしてのアンティキティラについて、最新情報をレポートしたい。

アンティキティラ・メカニズムとは何か？

まずは、古代遺物としてのアンティキティラ・メカニズムについての説明が

必要であろう。アンティキティラ研究については一般に公開されており（[www.antikythera-mechanism.gr](http://www.antikythera-mechanism.gr)）、考古学に興味があり詳細にフォローしたい方はもちろんご参照されたい。



「ウブロ アンティキティラキャリアー 2033-CH01」。  
サイズ30.4×38.0×14.14mm。手巻き（3時位置で調整）。部品点数495個。69石。毎時2万1600振動。パワーリザーブ約120時間。カレンダーおよび周期表示は18Kゴールドコーティング。ブリッジはブラックルテニウムコーティング。自社製ローター。  
表示：時分表示。トゥールビヨンケージに秒表示。フライングトゥールビヨン。（文字盤およびブリッジ側の表示の詳細はP64をご参照ください）

**発見**——1900年の終わりに、航海の途中で嵐に遭い、アンティキティラ島に停泊して嵐をやり過ごす船があった。その間、船員達は潜水具を身に付け、海綿動物（自然のスポンジ）ギリシヤ特産物のひとつ）を獲るために潜っていた。そこで船員達は水深40〜60mに沈没船を発見。その後1901年になりギリシヤ海軍等を動員し、様々な考古学的に価値の高い遺物を発見した。その中のひとつがアンティキティラ・メカニズムである。発見されたのは1901年だったものの、中を開けることもできず、当時の考古学者の武器のほとんどは想像力であったため、本格的な研究はようやくこの半世紀ほどの間にやっと進み始めたものである。

**解明**——事実として、どうやらこの「機械」は紀元前1〜2世紀ごろのものであること、そしてこれは「時間」を表す「時計」ではなく、天体の動きを示す「アラゴコンピュータ」のようなものだったことが明らかになった。33cm×18cm

の木箱の中には、30以上の歯車による輪列があり、中には「取扱説明書」が彫りこまれているという。82個の破片に分かれて見つかったこの偉大なる古代の機械は、アテネの国立考古学博物館に永久保存されているが、2005年に米英独の大学やハイテク企業の協力を得てX線による断層写真が中身を1/10mm単位で撮影することができ、その解析の結果、以下のことが新たにわかった。

すなわちアンティキティラ・メカニズムは時計ではなく、天体、特に月の動きを表す機械であること。その動きは正確で、数々の「周期」を表すことができ、すでに「閏年」の存在も認知され4年ごとに調整可能なメカニズムとなっていた（閏年を含んだ最古のユリウス暦はこの1000年後に登場する）。その他、火星、水星、黄道十二星座、月の満ち欠け、日食予測（エジプト暦）365日カレンダー、4年毎の古代オリンピックゲーム開催日等を示す機能があったようである。このレベルの複雑さを持つ天文時計は、約1000年後まで人類が生み出すことはなかった。

**どこで誰が作ったのか**——これは諸説あるがいまだ正確なことはわかっていない。現在の仮説は、天文学者ヒッパルコスやポセイドニオスらのコミュニティーによってロードス島において設計され

たのではないか、という説である。さらに最近の研究では、アルキメデスとも関係がある、という説もある。ただ、作られたのはギリシヤであろうという点では研究者の間で一致している。中に彫りこまれている取扱説明書はすべてギリシヤ語の元になったコイナー語で書かれているからである。

### ウブロの登場と挑戦

2008年、イギリスの科学雑誌「ネイチャー」にこの機械の破片の断層画像が公開され、それを読んでいた先述のマティアス・ビュッテ氏は感動して創造意欲をかき立てられた。そしてこの伝説の古代天体コンピュータへの敬意を表し、アンティキティラ・メカニズムを小型化した腕時計の製作を決定したという。彼はアンティキティラ・メカニズムを単にコピーするのではなく、忠実に再現した部分に加えて、時計としての機能はもちろん、独自の解釈も加えたキャリアーを目指した。

では「ウブロアンティキティラキャリアー2033-CH01」とは一体どんなムーブメントで、またどのような完成品（時計）になるのだろうか。R&D責任者のマティアス・ビュッテ氏を取材した。

# ジュネーブ・シールの新基準に即したヴァシクロン・コンスタントン2012新作 パトリモニー・トラディショナル・14デイズ・トゥールビヨン

19世紀に遡るジュネーブ製時計の原産地証明であるジュネーブ・シールは昨年、大幅に基準を改定し、より高度な品質保証へと発展した。今年6月から適用される新基準に即した新作をヴァシクロン・コンスタントンはS・I・H・Hで発表。新作と基準改定の概要をみてみたい。



「パトリモニー・トラディショナル・14デイズ・トゥールビヨン」。ケース径42.0mm、厚さ12.20mm。18Kピンクゴールド。3気圧防水。予価2289万円。今秋発売予定。



ヴァシクロン・コンスタントンCEO、ホアン・カルロス・トレス氏。ジュネーブ・ヴォー、ヴァレの時計製造業者連合(UFGVV)の会長を務め、ジュネーブ・シールの改正を積極的に支援するひとりだ。

文字盤側6時位置にある大型トゥールビヨンが目をひく「パトリモニー・トラディショナル・14デイズ・トゥールビヨン」は1月に開催されたS・I・H・Hで正式発表されたが、それに先駆け昨年12月初めにCEOのホアン・カルロス・トレス氏が携えて来日した。自社開発・製造の新ムーブメントを搭載するとともに、昨年11月に125周年を迎えて大幅な規定改正が行われたジュネーブ・シールの新基準に基づいている点の特徴だ。

搭載する手巻きムーブメント、キャリバー2260は4年の開発期間を経て完成したという。モデル名にあるように14日間というロングパワーリザーブをもつ。これは2010年に発表された「プラチナ・コンセプト」のひとつ、「パトリモニー・トラディショナル・キャリバー2253」と同様の、同時に解ける4つの香箱からパワーを得ている。キャリバー2253ではトゥールビヨンのほか、永久カレンダー、均時差表示、日の出・日の入り時刻表示、パワーリザーブ表示を備

えていたが、キャリバー2260ではこれらの複雑機構は除かれ、ムーブメントの厚さ6.8ミリという薄さを実現した。トレス氏に同行したヴァシクロン・コンスタントンのアーティスティック・ディレクター、クリスチャン・セルモニ氏はこのキャリバーを「美しさを追求したムーブメントです」と語る。

「ブリッジはキャリバー2253では3つですが、2260ではふたつにしました。これは将来、スケルトン加工をすることを前提にしているためです。3つよりもふたつの方が面の広がりがあり、美しいスケルトンができます。また強度も増します。ただ組み立てがむずかしい、という問題があります。さらにトゥールビヨンを大きく見せるために、筒車がトゥールビヨンから見えないように筒車の位置を少しオフセンターに位置をずらしています。そのため長短針が中心よりもわずかに12時側にずれているのです」

このほかキャリバー2253では裏蓋側に置いていた180度のパワーリザー

ブ表示を文字盤の12時位置に置き、280度の大きな表示に変更している。これによって約336時間という長いパワーリザーブの変化がより正確に把握できるようになった。

前述のように「パトリモニー・トラディショナル・14デイズ・トゥールビヨン」は2012年6月から適用される新ジュネーブ・シールに基づいて設計された、ヴァシクロン・コンスタントンとしては最初の時計となる。基準の変更点は次ページに述べるが、従来と同様にムーブメント部品の仕上げに関する詳細な規定のほか、精度や外装部品に関する規定が加えられている。全品検査で、検査はジュネーブのタイムラプ(ジュネーブ時計および精密工学研究所財団)で行なわれる。

時計としての完成度の高さを保証することで、ジュネーブの高級時計の信頼をさらに高め、その存在を保護することが目的といえるだろう。そしてそれは時計製造に関わる多くの職種を将来に向けて保護することにもつながる。

